



日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry : 略して JIFH) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、18 ヶ国 60 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

夏の海外ワークキャンプを実施

今年 8 月、アフリカのウガンダとアジアのマレーシアにおいてワークキャンプを開催します。開発途上国における極度の貧困による様々な問題を学ぶとともに、また当機構の活動現場でボランティアワークをします。ぜひご参加ください。

●キャンプの日程と主な内容

【マレーシア・ワークキャンプ】

期間：8 月 3 日(金)～ 14 日(土)

参加費：168,000 円 定員：10 名
(内容) ヌンパクビジョンスクールの子どもたちとの交流や学校建築、清掃作業のワークほか、市場見学等。

【ウガンダ・ワークキャンプ】

期間：8 月 16 日(土)～ 29 日(土)

参加費：338,000 円 定員：10 名
(内容) ナマスンビ村の学校での子どもたちとの交流、家庭訪問、教師用の建物やトイレの建設ワークなど。

広島事務所を移転しました

5 月 1 日より当機構の広島事務所を移転しました。移転先は、市内中心地の中区袋町 4 丁目です。

【新住所】

広島市中区袋町 4-8 CLC ブックス 2F

電話：082 (546) 9036

FAX：082 (546) 9037

※旧電話は新電話番号に転送されます。

2012「世界食料デー」のテーマ

今年の大会テーマは、「ハンガーゼロの世界を目指して…平和と飢餓」に決まりました。今回は、講演者のひとりとしてアフリカ・ルワンダで平和構築運動を行っている REACH 代表のカリサさんも来日します。

ハンガーゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ▶▶▶ 各種支援の お申し込み ができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ☐ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 1,000 円)
- ☐ チャイルド・サポーター (世界里親会) になりたいので説明書 (申込書) を送ってください。
- ☐ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 1,000 円)
- ☐ JIFH (日本国際飢餓対策機構) サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 500 円)
- ☐ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
- ☐ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名： _____ 男・女

〒 _____
フリガナ
住所： _____

(電話) _____

▼申込日： _____ 年 月 日▼

FAX・072-920-2155

ヘオルンヌリ
希望コンサート
東北と関東で
2,700 人動員



東日本復興支援活動と飢餓に苦しむアフリカの人々を応援するために韓国ゴスペルグループのヘオルンヌリによる「希望コンサート」が 3 月から 1 ヶ月にわたり宮城、岩手、東京、神奈川、埼玉、千葉で計 31 回開催されました。会場は、

仮設住宅 (東北) やキリスト教会、老人福祉施設などで、期間中に計 2,700 人が来会され、約 120 万円の支援金が寄せられました。

会場の一つとなった老人福祉施設「草加キングスガーデン」(草加市) でのコンサートでは、入居者と施設職員ら約 100 名が参加し、「上を向いて歩こう」「春よ来い」などの日本の歌の演奏の時には、一緒に歌を口ずさむ方もおられ、会場は温かい空気につつまれました。ヘオルンヌリとご協力いただきました方々に感謝をいたします。

ハンガーゼロ・サポーター 2043 名。さらに運動をひろげていきましょー！



日本国際飢餓対策機構

2012 No.262

5

飢餓対策 News



給食のあと学校の広場で元気に遊ぶフィリピン・ミンダナオ島の子どもたち。里親を募集しています。(4,5 頁に記事)

2012 年 4 月から長崎県五島市の桜島勤務を神様から命じられました。ここは「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として世界遺産登録をめざしており、五島市の堂崎教会、旧五輪教会堂、江上天主堂が構成遺産候補になっています。五島は、キリスト教の歴史の中で重要な位置を占める島々です。禁教の中を守り伝えられた信仰と、多くの殉教者そして棄教を迫る役人の責め苦にあえぐ信徒たちの悲痛な叫び、それらが今もなお影を落とす島々です。

400 年前の 1597 年 1 月 10 日、豊臣秀吉が命じたキリシタン処刑により大阪から長崎へ連行されて西坂の丘の上で処刑されたヨハネ五島は、ここ桜島が出身地とされています。診療の合間に訪れた寒村、芦の浦はヨハネ五島の出身地の雰囲気を感じさせてくれました。

さて五島は五島牛の産地でも有名です。美味しい肉に今からわくわくしていますが、メタボには気をつけなくてはなりません。飢餓対策と並んでメタボ対策も私の二大関心事です。

この両者が共生する病気が糖尿病で、膵臓からインスリンが出ない病気です。高血糖になり、尿に糖が出てきま

す。薬でインスリンを出すようにしますが、薬の量が多いとインスリンが出すぎて低血糖になります。

メタボも糖尿病も解決策は野菜です。肉は危険がいっぱいです。鶏肉には鳥インフルエンザ、牛肉には狂牛病、豚には豚コレラやサナダムシなど寄生虫の恐れがあります。長崎五島の子牛は三重に輸出されて美味しい松阪牛に変身し、さらに美味しくなるようです。メタボのお腹も時々断食をして変身させましょう。

世界に誇れる日本の寿司職人の寿司の一握りはご飯 20g です。この 20g を 1 回の食事です。その 20kg を日本からアフリカへプレゼントすると、年間数百万人の餓死が解消される計算になります。あなたのメタボなお肉 20g を輸出してみたらどうでしょうか？ お腹の肉が駄目なら、飢餓対策とメタボ対策の祈りを輸出しましょう。

「野菜を食べて愛し合うのは、肥えた牛を食べて憎み合うのにまさる。」(箴言 15 章 17 節)

日本国際飢餓対策機構 理事 木村雄二
(長崎県五島市伊福貴診療所 所長)

飢餓対策とメタボ対策

■発行者 岩橋竜介

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構

Web サイトアドレス <http://www.jifh.org/>
e メールアドレス general@jifh.org

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイトで

身近に
便利に
なりました



●郵便振替 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替 ●クレジット、デジタルコンビニ

大 阪 〒 581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155
東 京 〒 101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル 517 号室
TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782
愛 知 〒 466-0064 名古屋市中区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F
TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114
広 島 〒 730-0036 広島市中区袋町 4-8 CLC ブックス 2F
TEL (082)546-9036 FAX (082)546-9037
沖 縄 〒 901-0156 那覇市田原 3-8-1 コリ香ハウス 201 号
TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540
東 北 〒 980-0012 仙台市青葉区錦町 1-13-6 エマオ 2 階 E
TEL (022)217-4611 FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所 (八尾市、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が送付作業のご協力を下さっています。

ハンガーゼロ アフリカ 活動報告

「からだの飢餓、心の飢餓」のない世界の実現のために、日本国際飢餓対策機構のパートナーとして共に労して下さるハンガーゼロ・サポーターの協力が2,000口以上になりました！ 皆さまの尊いご支援は、昨年過去60年で最悪の飢饉に見舞われたソマリア、ケニア、エチオピア、ニジェールをはじめ、南スーダン、ウガンダ、ルワンダ、ザンビア、ジンバブエで以下の現地団体と協力して飢えと貧困に苦しむアフリカの人々のために用いさせていただいています。2011年7月から2012年3月の半年間のハンガーゼロ・アフリカの活動をまとめました。

サポーターの協力で支援拡大中!!



喜びと

苦しみと

感謝

その1

ボリビア駐在 小西小百合

日本国際飢餓対策機構の海外駐在スタッフとして計13年間、中南米で活動をしている小西小百合にインタビューしました。

QJIFHの海外スタッフとしての活動は、いつから？

1995年の夏からトレーニングが始まり1996年11月にドミニカに赴任しました。ドミニカでは3年活動しました。

Qそれからは？

2000年から4年間ペルーで。2006年からはボリビアに赴任して現在5年半になります。

Qその間、異文化の中で生活してこられた訳ですから苦しいこともいろいろあったと思いますが。

はい。まずラテンの人々の価値観・仕事や生活の仕方を理解し受け入れるまで時間がかかり、慣れるまではかなりイライラしました。彼らの物事や時間についての概念は私たちのものとはとても違います。

例えば俗に言うラテン時間。全ての場合には当てはまりませんが、多くの場合物事が遅れ遅れに進みます。予定時間に開始しない、会議・行事・約束事などを連絡なしにキャンセルしたり、公私

を問わず連絡なしに遅れてきても謝らなかつたりなど。ですから

「時間や約束事は必ず守らなければ！」と意気込んでいる自分だけが空回りしイライラして周囲を責める。しかし他の人たちは何とも感じていないなど、彼らの文化・習慣を受け入れるのにかなり苦労しました。

したくてもできない…

一方、彼らにとっても予定通りに進めたくてもそれが出来ない状況が存在するということも学びました。一例を挙げるとドミニカでは政府の援助が届きにくいハイチ国境の小高い丘にある村々の公立小・中学校を中型バイクで訪問しながら保健体育教育の指導をしましたが、村々には電話がない、何時間も歩かないといけない道のり、公共の車やバスがなかなか来ない、雨が降ると道がぬかるみ危険で、徒歩やバイクなどでの移動も無理になり、約束した会合に行きたくても行けないなど、授業や行事を実施したくてもできない事情がありました。

そのため緊急事態が起こっても連絡やけが人の輸送などの手段が



なく、事故後手遅れで亡くなった子どももいました。またボリビアでは海拔4,000m以上の地域で現地スタッフと共同生活しながら、異文化の中でのさまざまな葛藤、また高山病と寒さとの闘いがありました。そしてそのような状況の中で生きておられる人々のたくましさから学び、またその人々を理解し、工夫して働いておられるFHスタッフから多くのことを学んだのです。

*この記事は、次回に続きます。お楽しみに！

2010年、300万人が飢餓状態であった西アフリカのニジェールへは、バルナバス・ファンドと協力して穀物、粉ミルク、ビタミン剤、蚊帳などを支援しました。

また2011年9月には、干ばつと政情不安によって44万人もの人々が押し寄せた東アフリカのケニア・ソマリア難民キャンプ（ダダブ）に入り、FHケニアと協力し、調理用エコストーブ

を支援しています。

飢えのために命の危険にさらされている私たちの隣人、アフリカの人々が苦しみを乗り越え、自らの力で立ち上がることができるためには、パートナーとなって共に支援して下さるハンガーゼロ・サポーターがまだまだ必要です。

現在の目標は10,000口！一ヵ月1口1,000円のご協力をお願い致します。

●ハンガーゼロ・サポーターのお申し込みは、最終頁の申込み欄又はウェブサイトから。クレジットも利用可能です。

●海外スタッフ・サポーターとなって小西小百合を応援して下さる方を募集しています。（一口1000円から）



世界里親会 フィリピン ミンダナオ 活動地訪問



30人の里子支援を募集します

当機構の田村治郎（啓発総主事）と吉田知基が2月21日から3月2日までフィリピンを訪れ、昨年からの支援しているミンダナオ島の世界里親会の活動現場を訪問しましたので、そのレポートをお届けします。

食事は一日に1回か2回

子どもたちが通うティボロ（TIBOLO）小学校は、ダバオ市内から約85km、車で3時間以上かかるところにあります。学校はフィリピン最高峰アボ山の中腹で、標高約1,200mに位置します。この地域はバゴボ(BAGOBO)と呼ばれる現地民族が古くから住んでおり、周辺の土地はもともと彼らが所有していたものです。ところが今、その土地のほとんどはプラン

テーションを経営する会社によって買い上げられ、非常に安い値段で現地の人々に貸し出されています。そして人々はそのプランテーションで日雇いの労働者として働き、さらに収入を補うため本来は許可されていない伐採を行い、それらを薪として販売して生計を立てています。

また、生活用水が不足しており、衛生状態もよくないために、子どもたちはすぐ下痢をしてしまいます。病気になっても村には医

療機関がないので、治療を受けることができません。食事は1日1回、もしくは2回です。学校に来ている子どもたちを見ると、栄養状態が悪いためにお腹が出ている子どもや、髪の毛が茶色い子どもが多く見受けられました。学校の給食プログラムは予算の都合で毎週2回しか行われていませんので、それ以外はお弁当を用意するか、準備できない場合は、家に一旦戻らなければなりません。しかし、家に帰っても食べ物があるとは限らず、空腹をこらえて授業を受ける子どもや午後からの授業に出席しない子どももあります。中には遠い山道を数時間かけて歩かなければならない子どももいます。

私たちが学校を訪問した時、ちょうど給食時間の前で、学校に通う子どもの母親たちが協力して全生徒224名分の給食（週2回程



世界里親会では現在137人の子どもを支援しています。あと30人の里親さんを募集しています。ぜひ応援をお願いします。

厳しい貧困の中で成長する子ども達

度）を準備しているところでした。午前の授業が終わり、給食の時間になると、子どもたちは本当に嬉しそうに給食を食べていました。そして給食を済ませると、お腹一杯になった子どもたちが学校の校庭で遊び始めます。草の上に寝転んで、友達とじゃれあったり、校庭を元気に走り回ったり、とにかくみんな楽しそうで元気いっぱいでした。

見捨てられた子ども

その後、現地スタッフと学校の先生の案内で学校から徒歩で

20分ほど離れたところにある里子の家を訪問しました。ノルミナちゃんという小学校3年生の女の子の家です。ところが、そこには両親の姿はありませんでした。家にいたおばあさんに話を伺うと、彼女が生後8ヵ月の時に両親が上の3人の子どもを連れて都市部へ移住してしまったのです。以来、1度も迎えに帰って来ないとのことでした。両親に見捨てられてしまった彼女は祖父母に育てられています。

現地スタッフとしてこのセンターで活動している韓国飢餓対策機構のキムさんによると、このように親と一緒に暮らせていない子どもはこの学校では決して珍しくないとのことでした。貧しい家庭の親は生活苦から仕事をもとめて、この地域を出て行ってしまいます。その時に、まだ幼い子どもは世話をすることが出来ないと判断

し、何人かを置いて行ってしまうのです。子どもたちの笑顔の裏には、そのような哀しみが隠れていることを知り、貧困がもたらす悲劇に愕然としました。

しかしキムさんは続けて言われました。「私は10年後の子どもたちに期待しています。この学校で教育を受けた子どもたちがこの地域に良い変革をもたらし、彼らがコミュニティのリーダーとして成長すること。それが私の願いです。」（報告・吉田知基）

日本国際飢餓対策機構は、5年後、10年後の子どもたちの成長を期待し、そして彼らが大人になった時、このコミュニティに必ず変革をもたらしてくれると信じて子どもたちの教育支援を続けていきます。今後とも皆さまのご支援をよろしくお願い致します。お問い合わせは大阪事務所まで。



左からキムさん（韓国飢餓対策機構）、田村、コミュニティのリーダー、ディアス牧師



午前の授業の後はおいしい給食の時間



1年生クラスの授業の様子、この時は聖書を学んでいました。



ノルミナちゃんの家を訪問して保護者の祖母からお話を伺う

東北ボランティアが僕を変えた

ボランティア・加藤優樹（17歳）

僕は東北の地でボランティアをしてきて、たくさんの方々にお世話になりました。日本国際飢餓対策機構の皆さん、被災者支援をしているキリスト教会の皆さん、国内外からボランティアに来て一緒に活動をした皆さん、数えきれない方々に本当にお世話になりました。



僕自身短い間でしたが、周りの人に支えられて、少しずつですが自分に新しい変化が生まれてきました。とくに、この活動の中でイエス様に会って心に平安が与えられたことが大きな喜びへとつながっていきました。働けることの尊さ、働かせてもらえることの嬉しさ、神様と被災された方々に仕えていこうという気持ち、品性などをこの東北で学びました。それを思い返すと東北での活動は本当に自分にとって良い経験ができた時間でした。

僕は4月から東北に残り活動します。それは自分のためだけではなく、被災者の方々の少しでも役に立ちたいという決意があるからです。ですが、自分は何もでき

ない人間です。けれども、本当に手伝いたい、復興に貢献していきたいと思う気持ちがあります。そして、その間に自分を磨きたいと思っています。僕は未成年です。まだまだ子どもなので自分の意思だけでは決断できないことは分かっています。ですが、僕の思いは一つ、東北に残り活動していきたいのです。少しでも多くの人に希望を届けるお手伝いがしたいです。この機会にしっかりと自分の将来を見つめ、活動を通して何かを身につけて自分を成長させたいです。

僕は今高校に行っていないですが、来年から高校に行こうと思っています。今の通信制の高校を辞めて、来年から定時制の高

校に入学します。それまでの間、ボランティア活動をしながらか勉強もして、いろいろな経験を積みたいです。僕はもし東北を離れたら以前のようなフリーターとして気ままな生活に戻ってしまうと思うのです。でも、そうするとまたいろんな誘惑に負けて駄目な生活に戻って行きそうな気がします。もうそんな生活に戻りたくないです。過去の自分を捨てて、新しく東北で生活していきたいです。僕がいま読んでいる聖書の中に心に留まった言葉がありました。「悪から遠ざかって善を行い、平和を求めてこれを追い求めよ。」（第1ペテロ3章11節）です。

僕はこの言葉のように悪から離れ、遠ざかって善を行っていきたいです。僕はまだまだ未熟な人間ですが、この言葉にあるように平和を求めていく生活をしていきたいと強く思いました。その中で辿り着いた答えが東北で活動を続けていくということでした。どんな仕事でも精一杯、一生懸命に頑張りたいです。一年後高校に行くまでの間、東北の人々の復興のために、希望を届けるお手伝いをさせていただきます。と願っています。

子どもキャンプで喜びの再会実現！

3月24日、大雪が降り積もった宮城県柴田郡の「みちのく杜の湖畔公園」で、子ども一日キャンプを行いました。集まったのは、当機構が昨年8月に山形県月山で行った「子どもサマーキャンプ」に参加した被災地の子どもら16名と家族で、子ども同士や当機構のスタッフ、ボランティアとの喜びの再会が実現しました。参加された保護者から感謝の声をいただくことができました。さて第3弾は？



当日は屋外での楽しい雪遊びとともに、保護者からの要望で世界の飢餓についての学習も行いました。



東日本大震災による原発事故の影響を恐れ多くの外国人が国外に脱出する中で、韓国のフルート奏者ソルナム氏は地震直後から仙台入りし、その後64回の慰問コンサートを続けて来られました。このことを通して日本国際飢餓対策機構との関係が深まり、親善大使としてこれからも世界の困難の中にある人々に希望を与えるために協力して下さることになりました。

親善大使として隣人のために本当に役に立ちたい

Q 東北に行く決心をしたのは？

3月13日に、韓国の宣教師をはじめ多くの外国の宣教師が原発事故による被爆を恐れて自分の国に帰ることをニュースで知りました。帰国しない人も関西に移動するように言われていることを聞いて、私は憤りを感じました。大へんなときに日本の人を離れて宣教師が帰るのはよくない。困難のある時は一緒にいて共に祈るべきです。私は妻に「明日私は日本に行きます」といいました。すると妻はすぐに「私もそう思います」と言ってくれました。

Q それから活動を始められたのですね。

仙台に連絡すると、下着、靴下、マスクなど800人分が必要と言われ私一人では難しいと考えて、思い当たるところに協力をお願いしました。その中でアフリカで井戸を作っている団体からマスクを、クリスチャン学生の団体から下着の会社を紹介してもらい、

1日で話がまとまりました。

さらに、アジアナ航空が下着の輸送を助けてくれました。職場の人が私のコンサートに来て下さったことがあったそうです。被災地への輸送はヨハン教会の助けを借りることができました。

Q ソルナムさんご自身はいつから東北に？

津波の4日後16日から仙台でコンサートをしました。それ以後毎月1週間ずつ10月まで避難所に行きました。10月末からは仮設住宅でコンサートをしました。仮設住宅には避難所で会った人がおられましたが、そのうち何人かが洗礼を受けられたということです。嬉しかったです。

Q ソルナムさんの【ふるさと】という曲はいつ作曲されたのですか？

津波の前です。私はソウル出身で、アメリカで勉強しましたので、海とは関係なかったのですが、なぜか船の音を入れたくて入

れました。神様が備えて下さったのです。避難所には漁師の方が多かったのです。「必ず船で仕事ができます。かもめも来ますよ」とこの歌で励ますことができました。希望を与えることになって感謝です。

Q JIFHの親善大使になってくださったのはなぜですか？

カーネギーホールやリンカーンセンターでもコンサートをしたが、私は神様から頂いた賜物を用いて隣人の役に立ちたいのです。名前だけではなく、本当に役に立ちたい。JIFHの働きは大切です。64回のコンサートは神様がJIFHと関係を作るために準備して下さったと感謝しています。

■2012 世界食料デーに出演決定

ソルナム氏は、10月に開催される「名古屋大会」(13日)と「南大阪大会」(27日)での出演が決定しています。他大会や独自のチャリティー企画にも出演が可能です。連絡は東京・大阪事務所まで。